神の焔は紅く切なく…

紅霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神の焔は紅く切なく…

【Ｎコード】
Ｎ４１１５Ｕ

【作者名】
紅霞

【あらすじ】
エージル王国――神に愛されし者たちが暮らす、自然豊かな国。この国に暮らすのは、神に愛され、特別な力を持つものばかりだった。
誰もが幸せに、何不自由なく暮らしていたあの時代。もう、そのときは戻ってこないだろう。
その国でかつて起こった誘拐事件。
その事件を伏線に、五年ぶりに事件の歯車が廻り始める。

敵対国の不審な行動、裏切り――。
エージル王国の姫、エレジーに降りかかる困難を、切り抜ける術は存在するのか――。

序章　奏でられた前奏曲

それは、ある満月の夜に、突然起きた出来事だった――。

城の三階に備え付けられているバルコニーから、エレジーはいつものように夜空に浮かぶ月を眺めていた。

漆黒の空に浮かぶのは、星と大きな月だけ。月は満ち、城の全体を月明かりが照らしている。空気は澄み、涼しい風が、バルコニーへと流れていく。今日は、とても過ごしやすい夜になるだろうと思うほど、とても美しい夜だった。

エレジーは、その城に住む姫らしく、白いドレスに身を包んでいる。磁器のように白い肌と、金色のブロンドの長い髪から、上品で女性らしいオーラが醸し出される。

この風景はエレジーが最も愛しているものだった。夜の闇に、星、月、風――。全てにおいて偶然に出来上がったものとはいえ、自然と落ち着く。今まで見たものの中で最も美しく見える。何と言っても、この微妙な光の加減がいいものだ。明るすぎず、かといって暗すぎもせず――。

「エレジー」

バルコニーの下、庭から、男性の声が聞こえる。聞き覚えのあるその声に、エレジーは、バルコニーから身を乗り出す。

「ジェミス！」

庭に立っているのは、エレジーの幼馴染に当たる、ジェミスだった。

茶褐色の髪に、琥珀色の瞳を持つジェミスは、黒い軍服に身を包んでいる。

「どうして此処に――？」

エレジーの問いに、ジェミスは照れ笑いをしながら答える。

「遊びに来た。エレジーも、こんなに綺麗な月なのに、一人で見る

なんて寂しいなと思ったから、さ」
　こんな時間に、来るなんて思ってもいなかった。
　仮にも、貴族の一人息子が、こんな時間に両親の許可も無く勝手に出てきてしまって良いものなのだろうか。
「エレジーの家だったら、母さんたちも許してくれると思って」
　ジェミスは、エレジーに笑いかけた。
　その笑顔を見て、エレジーも表情を綻ばせる。
「もう……っ。ちょっと待ってて。私の家に入りなさい」
「仰せのままに、お姫様」
　ジェミスは、冗談交じりでエレジーに言った。
　エレジーは、その言葉に少し頬を膨らませるが、ドレスを翻し、ジェミスの待つ庭へと足を運んでいった。

　木々が鬱蒼と立ち並ぶ森のような庭は、バルコニーから眺めているよりもまして暗かった。その暗さに、エレジーも怯えを感じる。
　庭に下りたというのに、ジェミスの姿は見えなかった。
「ジェミス……？」
　ふと、視線の先に人影が映った。エレジーは、静かに声をかけてみた。しかし、その影は動きもせず、エレジーの言葉にすら反応しなかった。
「ジェミスってば！　勝手に来ておいてそれは――」
　エレジーの言葉を待たずして、影はエレジーの腕を掴んでいた。
「何をするの？　ちょっと、離して」
　影はその言葉すらも無視する。
「……ジェミス……？」
　エレジーに一抹の不安がよぎり始める。腕を掴む強靭な力。それは、どう考えてもジェミスのものとは思えない。もしかして、この人はジェミスじゃない――？
　気付いたときには、もう遅かった。影は無理矢理にエレジーを引きずろうとする。

「やめてっ！」
エレジーもそれに反抗するが、力が強すぎてそれは叶わない。
「エレジー！」
声が耳に届くと同時に、影に襲い掛かる小さな男の姿がエレジーの目に映った。
ジェミスだ――。
「大丈夫かい、エレジー」
「ジェミス……」
影は、ジェミスの攻撃を受けて、倒れている。だが、それはすぐにでも動き出しそうで――。
「エレジー、すぐに城に戻るんだ。ここは、僕が――」
「駄目！　一人で戦うなんて危険すぎるわ」
ジェミスが戦おうとしていることは、声色と構えた剣から一目瞭然だった。
エレジーは、戦いを好む人間ではない。勿論、こんな状況になったら止めに入ってしまうのだ。
「良いから戻って。一国のお姫様に何かあったら、国は混乱する」
「でも――」
「早く！」
ジェミスに怒鳴られ、エレジーはその指示に従うことにした。
戦いの場から逃げさる。それは、城の者にこの事件を伝えるためだった。そして、ジェミスを危険から逃れさせるために――。

ジェミスの行動により、一国の姫君の命が救われたことは、言うまでもない。だが――。

ジェミスがその事件で行方不明になったことをエレジーが知るのは、その翌日のことであった――。

再び廻る…　1

エージル王国――大陸の中央に存在する、四方を山に囲まれた国。規模は比較的大きく、各国とも重要な繋がりを持っている。四季折々の花が咲き誇る、自然豊かな場所だ。

この国に住む人間はみな、神に愛でられ、特殊な力を持ち合わせていた。力の大きさは、人によって違うが、その力によって国は大きく三つに分けられていた。

一つ目、国の南端の地、ミカレン。ここは森に囲まれ、先住民がひそかに暮らしている。年齢層は高く、国のことを詳しく知るものが多い。エージルの歴史を尋ねるならば、まずこの地に向かえといわれている。力は、弱いものが多く存在する。

二つ目、活気あふれる街のあるホース。毎日沢山の人々が、入れかわり、立ちかわり、にぎやかにすごしている。力の大きさは、国の平均程度。強くもなく、弱くもなくといったところだろう。

そして三つ目、王宮の存在する、セーリン。王をはじめ、身分の高いものが暮らしている。政治経済を動かす地でもある。この地にいる人間は、力が絶大で、他の国民とはかけ離れている。中でも、最も絶大な力を持つのは、王族のミハーリン。彼らの能力を駆使すれば、不可能はないともうわさの立つ、それはそれは絶大な力を持つ人間が、王宮には集っていた。その中で最も絶大な力を持っているとされるのが、皇太子の娘――エレジー。彼女は、エージルの中で、最も神に愛された存在とされていた。

雪解け水が川に流れる春の日、エレジーは、いつものように庭で花の世話をしていた。

「エレジー様。そちらは私たちのほうが――」

使用人たちの声に、エレジーは手を止める。

「いいのです。ただ、私がやりたいと思っただけですので」
「しかし――」
使用人としても、流石に一国の姫君にこのようなことをさせる事は、気が引ける。
だが、エレジーは、どうしても花の手入れをしたいと言う理由があったのだ。
今から丁度五年前の今日――エレジーの昔からの顔見知りのジェミスが行方不明になったのが、その日だった。ジェミスは、男だと言うにもかかわらず、植物が大好きで、エレジーの城の庭に咲く花の世話を、手伝っていた。そのおかげで咲くようになった花もある。エレジーは、だからこそ、特にこの日だけは――自分の失態のせいでジェミスを行方不明にさせた日だけは、ジェミスに代わって、花たちの世話をしようと決めていたのだ。
「私にできることは、これだけですから――」
静かに呟くエレジーの表情は、とても哀しげだった。
「こんな所に居たのか、エレジー」
バルコニーから聞こえた声に、エレジーは顔を上げた。
視線の先にたっていたのは、エレジーの兄、ルシナだった。
銀色の髪を風になびかせ、彼自身が持つ藍色の双眸で、庭に居るエレジーへと視線を落とす。白い燕尾服に身を包み、皇太子らしい立ち居振る舞いをしている。
「お兄様」
「お父様が、お呼びだ。すぐに泥を落として、上がってきなさい」
「お父様が……？　判りました。早急に向かいますわ」
エレジーが返事をすると、ルシナは城の中へと入っていった。
それと同時に、エレジーは、使用人たちに一礼し、ワンピースを翻しながら城へと戻る。
一体、何の用なのだろう――。エレジーは、そう思いながら部屋で着替えを済ませていた。今、エレジーが着ているのは、先程の動

きやすいワンピースではなく、ちゃんとした水色のドレスだった。父親――いや、一国の王に謁見するのだから、それに相応しい格好をしなければ、無礼際なりないというものだ。

コンコン――。

ドアをノックする音が、エレジーの耳へと届く。

「用意は整ったか」

ドアの向こうに立つルシナが尋ねる。

「ええ」

短く答えると、エレジーは自室のドアを開け放ち、ルシナのもとへと向かった。

「……ねえ、お兄様。お父様からのお話とは、何なのでしょうか」

エレジーは、それを聞かずには居られなかった。エレジーの父――エージルの現国王のロマリオも、五年前の今日にあった事件を知っている。その上、エレジーがこの日にドレだけのショックを受けたかも、この日が、エレジーにとってどんなに特別な日であるかも――。だからこそ、この日にエレジーが国王に謁見するような機会を作らないように、ロマリオも心得ているはずだった。

「さあ、な。だが、この日に謁見をなさるという事は、相当緊急の用事だと思われる」

「そうですね。……緊急の用事――か」

今の状況で、緊急の情報が入ったとしても、それはおかしくはない状況だった。

エージルの隣国に当たる、アーヌ王国が近々怪しげな動きを見せていると言うのは、エレジーの耳にも届いている情報だった。

アーヌ王国――かつてエージルから独立した国家。それはおよそ百年も前の話だが、その原因は、現在のアーヌの地区に住んでいた市民たちが、エージルの思想や政治に反感を持ち、自ら独立することを宣言したとされている。そのせいで、今でもアーヌとは対立しあっているわけだ。

「……どちらにせよ、俺たちはただの駒だ。お父上の仰るとおりに

すればいい」
ルシナは、静かに呟いた。
「え――？」
「いや、なんでもない。――さあ、着いたぞ、エレジー」
王宮の長い廊下の奥に、ロマリオの書斎は存在する。一見、どの部屋とも変わりのないつくりだが、この部屋が、他に比べて広く、守りも万全であることは言うまでもない。
「父上。エレジーを連れてまいりました」
書斎のドアをノックし、ルシナが部屋の中に居るであろうロマリオに声を掛ける。
「入ってくれ」
書斎の中からロマリオが返答したのを確認してから、エレジーとルシナは書斎のドアを開ける。そのまま、書斎の一番奥のソファーに座っているロマリオのもとへと歩み寄った。
エレジーと同じ金色の髪を後ろで一つに束ね、紅いローブを身に纏っているロマリオは、見るからに国王のオーラが漂っている。
ロマリオは、本から視線を上げ、エレジーを見つめる。丸眼鏡の奥にある瞳が、優しげであり、それでいて鋭く輝く。
「お呼びでしょうか、お父様」
エレジーは、ロマリオに一礼する。
「エレジー。思ったより、早かったな」
「お父様のお呼び出しですから」
エレジーは、頭を上げた。今目の前に居るロマリオは、お父様である前に、一国の王なのだ――。無礼な態度を取ることは許されない。もう一度、そう思い直した。
「父上、それでは私はこれで――」
ルシナは、自分の任務を全うしたかのように、部屋から立ち去ろうとする。
「ルシナ、君も残れ。――二人に、重要な話がある」
ルシナは足を止める。そして、二人ともが、ロマリオの言葉で真

剣な顔つきにと代わっていった。
「呼び出したのは、他でもない。隣国のアーヌのことについてだ」
やっぱり――。エレジーの予想は当たっていた。この時期、この状況で呼び出される理由は、殆どがアーヌとの関係についての注意・忠告だった。
「……アーヌ国、ですか」
「ああ。――君たちももうすでに知っているとは思うが、隣国のアーヌで不審な動きが続いている。そこで、そちらの方に極秘で使者を送ったのだが、ある重大な情報が耳に入った」
重大な情報――それはおそらく、何かが起こる前触れとなるだろう。エレジーは、そんな不安を覚えた。
「重要な情報、とは」
ルシナは、冷静な口調でそれをたずねる。
「『悪魔ノ殺シ屋』と言う物を聞いたことはあるか」
エレジーは、そんな物騒な名前のものを聞くのは初めてだった。
ふと、横に視線を送ると、ルシナは、それを知っているかのように、目を見開いていた。
「お兄様――」
「悪魔ノ殺シ屋――まだエージルが分立する前に開発されていた、最強最悪の毒物。体内に少しでも入ると、たちまちその人間を死へと追いやる――。確か、エージルとアーヌの分立は、この毒薬を廻るものだったという説もあったかと――」
最強最悪――ルシナの口から出てきた言葉は、壮絶なものだった。百年も前とはいえ、エージルがそんな物を開発していたとは、とても驚きの事実だった。
「流石だな、ルシナ。実は、それに関する情報なのだが」
なんだが、胸騒ぎがしてきた。さっきの予感は、本当だったと告げるように――。エレジーの胸の鼓動は、次第に高まっていく。まるで、アレグロの曲を奏でるように――。
「アーヌが、悪魔ノ殺シ屋を開発していると言う噂が立っているら

しい。詳しいことは判らないが、これがどういう意味かは、理解できるね」
書斎に、重々しい空気が流れる。それは、全員が同じことを頭に思い浮かべているからなのだろう。
アーヌは、近いうちにエージルに何かを仕掛けてくる――。
「……それで、お父様。私たちは、それに関しては何をすればよいのでしょうか」
「とりあえず、近いうちに戦火があがることは目に見えている。それまでは、訓練にはげみ、万全の対策を練ってもらう。今日呼んだのは、それを伝えるためだ」
書斎に、沈黙が流れる。その間、エレジーが考えていることは、エージルとアーヌが戦争などを起こさないこと。ただそれだけの、世界平和――。
「父上。それでは、我々は訓練へと向かうことにいたします。行くぞ、エレジー」
「はい、お兄様。それでは、ごきげんよう、お父様」
エレジーは、ルシナに促され、ロマリオに一礼した。
「ああ」
そのまま、二人は書斎から出た。
長い廊下を、エレジーとルシナが並んで歩く。それは、歩きなれている廊下のはずなのに、先程までの重々しい空気のせいか、いつもよりも長いように思えた。
「お兄様。アーヌは何を考えているのでしょうか」
エレジーは、ルシナにたずねてみた。
ルシナは、暫くの沈黙の後、目を伏せた。
「さあ、な。だが、その毒薬を使って、良からぬことを企んでいるのは察しがつく」
やはり、何か理由があることに違いはない――。それが一体何なのか、それによっては戦火があがることを早めるかもしれない。今、自分にできることは、自分だけでも、アーヌを刺激するような行動

を控えることだけ――。
「……エレジー。例えアポロン様のご加護を受けているお前でも、『悪魔ノ殺シ屋』には気をつけろ」
ルシナは、静かな口調で警告を出した。
アポロン――エレジーが愛でられているその神は、『太陽神』と呼ばれる。エージルの中でも、愛でられる人間は珍しく、その上、強大な力を持つとされる。
「それは――神の力以上に、その毒薬が危険だという事ですか」
「いや。その毒薬自体、データが少ないんだ。開発に携わっていた人間は、殆どが現在のアーヌの者だから、な」
データもないのに、どうやって防ぐのだろうか――。
「その上、解毒剤も存在しない、厄介なものだ」
ルシナの話を聞き、事の重大さを一気に思い知る。体内に取り込めば即死、その上、解毒することも出来ない――。そんな物を持っている相手を敵に回したら、エージルは――完全に壊滅する――。
「……どちらにせよ、相手にそれを使わせなければ問題はない。もしもの時に備え、鍛錬していれば、何とかなるだろう」
長い廊下を歩み終えたところで、ルシナは近くに飾られていた短剣をエレジーへと渡した。
「俺は、これから訓練に向かうが――お前も来るだろう」
ルシナは、エレジーの考えを見透かしたように言った。
「ええ。そうするわ」
エレジーは、エージルの皇太子の娘であると同時に、女騎士でもあった。腕前は確かで、剣にピストル、どんな武器でも起用に使役する。生まれながらにして持ち合わせた才能だが、それに日ごろの努力が重なり、国内でエレジーの騎士としての腕前を知らない人間は居ないほどだった。
「ルシナ様、エレジー様」
遠くから聞こえる声に、エレジーとルシナは反応する。声の主は、使用人の一人だった。

「お二方、これからどちらへ――」
「ああ。少し軍のほうで訓練をしてこようかと――」
ルシナの答えを聞き、使用人の顔つきが一変し、険しいものとなった。
「どうかしたの？　使用人さん」
それを逸早く察したのは、エレジーだった。
「今、そちらへと向かうのは少し危険かと――」
「危険、とは？」
使用人は、辺りに視線を動かし、周りに誰も居ないことを確認すると、ゆっくりと話し始めた。
「このようなお話をするのは、少し、いかがなものかとは思ったのですが――」
使用人は、そのままの口調で、話を続ける。
「最近、この周辺の街で、辻斬りの事件が続いているのでございます」
「ほう」
ルシナは冷静なままで聞いていたが、エレジーにとっては、衝撃的なことだった。
最強最悪の毒薬に続いて、辻斬り――。世の中も、これまで物騒になってきたとは――。
「犯人は判りませぬが、噂によると、その者は、黒いマントに身を包み、まるで悪い魔術師のような身なりだと言われています。そして、この近くの森に現れるとか」
「近くの森って――それってもしかして……」
エレジーには、その森に関して思い当たる節があった。
「兵の基地がある森ではないですか」
エレジーとルシナがいつも鍛錬をするのは、王宮の南にある大きな森の奥の基地だった。
そこで辻斬りが隠れているとしたら――。
「お兄様、危険ですわ。本日の訓練はやめたほうが――」

エレジーは、不安そうにルシナを見つめる。
「ちなみに、その辻斬りの顔を見た人間は居るのか」
だが、当のルシナは、エレジーの話など聞いてはいないようだった。
「少しお待ちください。早急に、思い出します」
使用人は、記憶を辿り始める。
エレジーは、その間、話を整理していた。
黒魔術師のような身なりの敵――。普通に考えれば、それはアーヌの人間で間違いないだろう。だが、アーヌに、そんな行動を起こす理由などあるのだろうか。――もしかして、本当に戦火が――？
「確か……聞いた話では、齢はエレジー様と同じほど、小柄で、赤褐色の髪の人間だと」
同い年くらいで、小柄で、赤褐色の髪を持つもの――。エレジーがすぐに思い浮かべたのは、ある一人の少年だった。かつての友人、今は消息不明の人間――ジェミス――。
「エレジー？」
まさか、まさかそんなはずは無い――。そうだよね？　まさか、貴方が敵に廻ることなんて、ありえないよね――。
心に問いかけても、答えなど返ってはこなかった。
「……成程。それは、ジェミス君である可能性もあるのか」
ルシナも、エレジーと同じ可能性に気がついたらしく、呟いた。
「エレジー。真実は、自分の目で見て、受け入れてはどうだ。今此処で、どんなことを考えていても、どうにもならないものではないか」
ルシナは、遠くを見つめながら言った。それは、真っ直ぐとした言葉で、エレジーの胸に響いたことは、言うまでも無い。
「……そうね、お兄様」
エレジーは、短剣を握り締めた。
「使用人さん、ご忠告、ありがとう。でも、私、やっぱり行ってみる。その辻斬りにあわないかもしれないし、会ったとしても、相手

が誰なのかを確認しておきたいの」
「エレジー様……」
「もしもの時は、軍の人間も居る。それに、俺が彼女を護るさ」
ルシナは、近くにあるロングソードを手に取り、腰につけた。
「行くぞ」
ルシナが歩き始めると、それに続くように、エレジーも歩き始める。すれ違い際に、エレジーは、使用人に軽く会釈した。
使用人は、エレジーとルシナが見えなくなるまで、深く頭を下げていた。

再び廻る…　2

ルシナと共に、軍の訓練に合流することにしたエレジーは、もう一度自室へと戻った。水色のドレスから、今度は、赤色の軍服に着替える。

まったく、今日はつくづく着替えが多いな――。

「エレジー、着替えは済んだか」

ドアの向こうから、ルシナが催促をする。

「ええ。今出ますわ」

エレジーは、腰のベルトに短剣をさすと、もう一度鏡の前で身だしなみを整える。

「よし……」

エレジーは、ドアを開け、ルシナの前に姿を現す。

「お待たせしました。お兄様」

ドアの前に立っているルシナも、燕尾服から、黒の軍服に服を変えていた。

ルシナは、エレジーの姿を一瞥し、ある一点に目を留めた。――髪だ。

「その髪――」

ルシナは、エレジーの髪に指を絡める。

「結んだほうが、動きやすいのではないか」

エレジーの髪は、いつもどおり下ろしてあった。エレジー自身、それはいつものことなので、何もかまってはいないようだったが、確かに、このままでは動くたびに髪がなびいて、邪魔になること間違いなしだ。

「そう、ですね」

エレジーは、軍服のポケットからヘアゴムを出し、髪をポニーテールに結わいた。

「一応仮ですし、これで問題ありませんよね」

「ああ。では、基地に向かうことにしようか」
エレジーとルシナは、基地へと向かい始める。
その間、エレジーは、先ほどの使用人の話を少し気にしているようだった――

エレジーとルシナを乗せた馬車が、王宮近くの森へと入っていった。
王宮のあるセーリンとホースの狭間にある森の中に、エージルの軍基地のひとつがある。
軍基地は、エージルの中に合計5つ存在するが、エレジーとルシナが所属するのは、この基地だ。王宮および、皇太子、皇太子妃、その他王宮に住む者を護ることこそ、この基地に所属する騎士団の役割だ。本来は、エレジーとルシナも護られる側の人間なのだが、本人の意思で、軍に属することとなったのだ。
あの日――あの日に誓ったんだ。私は、護られる人間じゃなくて、誰かを護る存在になるって――。エレジーは、過去の記憶を思い出していた。
「……エレジー、もうすぐ到着だが――」
「……」
ルシナが声をかけるが、エレジーは、そんな声が耳に入っていないかのように、ぼんやりと窓の外を眺めていた。
「おい、エレジー！」
「……え、あ、はい。何でしょうか、お兄様」
やっと、自分を呼ぶ声に気がついたように、エレジーが返事をする。
「どうした。お前らしくもないな。ぼんやりとして――」
「あ、いえ……。ちょっと、過去を思い出していて――」
思い出していたのは、ジェミスのこと。あの、忌まわしい事件――私が、自分自身に誓いを立てたあの日のこと――。
「……お兄様、やっぱり、ジェミスは――」

刹那、馬車が突然ブレーキをかけ、とまる。
「きゃっ！」
エレジーは突然のことにバランスを崩した。
それを、ルシナがやさしく抱え込む。
「大丈夫か」
「え、ええ……」
「申し訳ございません、ルシナ様、エレジー様。ご無事ですか」
運転手はエレジーとルシナをのぞき、安否を尋ねた。
「大丈夫ですわ」
「何か、あったのか」
「どうやら、春の嵐の所為で木が倒れたようです」
運転手は、馬車から降り、倒木のそばに立つ。
エレジーとルシナも、運転手に続いて馬車から降りた。
目の前に見えたのは、幾本かの倒木。それによって、道は塞がれていた。森の中であるゆえに、他に馬車が通れるほどの広い道もなく、辺りは静寂に包まれていた。それが、なんだか不気味なように思える。
「……本当に嵐か――」
ルシナは、倒木を見ながらつぶやく。
「え？」
「倒木の端をよく見てみろ」
ルシナに言われ、エレジーは倒木の傍に屈む。
「……！これ――」
倒木の切れ目は、まっすぐできれいだった。そう、強い風によって倒れたのではなく、まるで、何者かの手によって切り倒されたかのように――。
「ああ。嵐の所為じゃない。この森で、俺たちを足止めするためだ」
「でも、どうしてそんなこと――。あっ！」
エレジーの脳裏を、厭な予感がよぎる。
「成程。この森には、招かれざる先客がいるといったところか」

ルシナの少し面白そうで同時に冷静な声が、森の中にこだました。

再び廻る…　3

ルシナの言葉に、エレジーは驚きを隠せなかった。
招かれざる客――それは、アーヌの人間のことを指しているのだろう。そうだとすれば、この森には、敵が潜んでいるかもしれない。
「お兄様……」
エレジーは、無意識のうちにルシナの服の袖をつかんでいた。
「心配するな、エレジー」
ルシナは、優しくエレジーの頭をなでる。
「さて、と。どうしたことかな」
森の中、このまま立ち止っていることは危険だ。ここで敵に出くわしたら、もう逃げる道はない。
敵の状況も把握できていない今、状況は不利。ここからどう出るかによっては、命も落としかねない――。
「隊長――！」
不意に木の陰から声が聞こえた。
「誰だ」
ルシナの声とともに、木の陰から一人の男が現れる。
その人物は――。
「キャメル様」

「ああ――。何者かがいるようだな。キャメル、悪いが、馬車の運転手と一旦王宮のほうに戻ってもらえるか」　エレジー、ルシナと同じ隊に所属する兵士、キャメルだった。
「エレジーも一緒だったんだね。隊長、この有様は――」
キャメルもまた、倒木を見て声を上げる。
ルシナが考えていることは、なんとなくわかる。
きっと、一人で行動することが危険だということなのだろう。
「わかりました。隊長とエレジーは――？」

「俺たちは、このまま基地へと向かう」
「基地へ――？　でも、今この森は危険なのでは……？」
キャメルは、ルシナを心配そうに見つめている。
無理もない。先程ルシナの口から、『誰かがいる』という言葉が出たのだから。
「問題はない。基地まではそんなに時間はかからないからな。エレジー、行くぞ」
ルシナは、キャメルのことなどお構いなしに、歩き始める。
「お兄様……っ」
エレジーも、キャメルに一礼すると、そのままルシナを追いかける。
「エレジー」
それを、キャメルが呼び止めた。
「なんですか、キャメル様……？」
キャメルの表情は、真剣そのもので、笑いなど一つもない。
むしろ、怖いくらい――。
「……いや、なんでもない。気をつけろよ」
その言葉に、エレジーは頷いた。
「ありがとうございます」
さっき、何を言いたかったのだろう――。
気になったとしても、もう問い返すことはないだろう。それよりも今は、前に進むことを考えるのみだ。

エレジーとルシナが基地に向かい去っていくのを確認し、馬車の運転手がキャメルに話しかける。
「――どうやら、うまくいったようですね」
運転手の一言に、キャメルは怪しげな笑みを浮かべる。
「ああ。あの方のお考えだ。失敗するはずなどないだろう」
二人は、まんまと騙されているな、と言わんばかりの蔑みの視線を、森を進む兄妹に向ける。

「あのお方は、今、この森へ？」
「ああ。おそらく、彼らが進む先にいるだろうな」
ザアァ――。
木立を風が吹き抜けていく音が、妙に恐ろしく聞こえた。まるで、これからの悲劇をうたっているかのように――。
「まあ、俺は当分、殿下の指揮する隊の人間ってことで、通させてもらうことにするよ」
キャメルの言葉は、何かを楽しんでいる子供のような口ぶりだった。
「とりあえず、お前を王宮まで送ることが、殿下の申しつけた仕事だったっけ？」
「ええ、そうでしたね」
「んじゃ、任務遂行と行くか。――馬車を出せ」
「かしこまりました」
黒幕の一員である二人の乗る馬車は、王宮へと走り出した――。

再び廻る…　4

黒幕の存在などつゆ知らず、森を進み続けるエレジーとルシナ。
先程の妨害以外には何も起きていない。今のところ、安全といってもいい。
だが、妨害があった以上、敵が潜んでいる可能性は高い。軍の基地があり、人の出入りが多いこの森であれだけの妨害があったのなら、もうすでに他の誰かに被害が及んでいるはず。そのような話は聞いていない。
なぜ、あんなことを――？　どれだけ考えても、敵の意図が何もつかめない。
「エレジー！　後ろへ」
不意にルシナが声をあげ、エレジーを木の陰に隠す。
「お兄様……？」
「……人の気配がする」
ルシナの顔は、真剣そのものだった。それが、近づいているのが見方ではないかもしれないという現実を突き付ける。
エレジーも神経を集中させる。
確かに、人の気配はある。誰かが――何かを話している――？
ひそひそとした声が響く。たまに、はっきりと聞こえる単語――。
「……は、私……」
「……が、あの方の――」
あの方――？　誰のことなの？
話の全貌をつかもうと、小さな声に耳を傾ける。
「ああ。それが、ジェ……ス様の――」
聞き覚えのある名前――。まさか、でも、そんなことって――。
だが、そんな期待でさえも次の言葉に打ち砕かれる。
「そうだな。すべては、ジェミス様のため」
なぜか、その台詞だけがはっきりと耳に届いた。

聞き覚えのある名前に、驚愕するエレジー。
声の主は、エレジーたちが近くに潜んでいることなど知らずに、森の奥へと去って行った。
「……行ったみたいだな」
ルシナは、それを確認すると、再び歩き始める。
何事もなかったかのようにふるまうルシナとは対照的に、エレジーは、未だ混乱していた。
「どうかしたのか、エレジー」
「……」
それに気づいたルシナが、話しかけるが、エレジーは心ここにあらずという感じで何もしゃべらない。
「エレジー！」
「え！？　あ、何でしょうか、お兄様」
「……気にしているのか、さっきの会話」
ルシナに図星をつかれ、動揺するエレジー。
「……忘れろ。さっきの会話は、何も聞こえなかった。――それでいいだろう」
ルシナは、先程のことをすべて記憶から消し去ろうとしているようだ。
「でも、お兄様！　ジェミスは――」
「さっきの会話が、ジェミスに関することだったとしても、俺たちには関係のない話だ。目の前に立ちはだかる敵が、誰であろうとも関係はない」
先程聞こえたものがすべて本当のことだとすれば、ジェミスは敵の手に堕ちたということになる。かつての友人――幼馴染が敵に回るなど、信じがたい現実だ。
「それに、今のままでは彼を救うことができないんじゃないか」
ルシナの言葉に、エレジーは、はっとなる。
そうだ。たとえ敵にまわっていたとしても、救い出すことが不可能なわけじゃない。

ルシナも、エレジーが考えそうなことをわかっていた言ったのだろう。敵がだれであっても、どれだけ多くても、そんなことは何の問題でもない。すべて倒せばいいだけの話だ――。

「……そう、ですね。お兄様」

エレジーは決意を決めて、歩き始める。

待っていて、すぐに救い出すから――。

決意とともに再び廻りだした運命の歯車。これがどんな結末を謳うのか、誰も知ることはできない――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4115u/

神の焔は紅く切なく…

2011年9月26日16時11分発行